

# 第一章 神社

## 第一節 神社の由来と変遷

宗教は、先土器時代から始まったといわれるが、その宗教生活や宗教観念については定かでない。縄文時代の遺跡からは、土偶が発掘されるが、それは、人間の身がわりにされたと思われる。おそらく土偶は呪術につかわれたものと想察される。県下では釈迦堂遺跡（二宮町）などが、その典型を示している。

縄文中期以降、大きな石を並べたり組んだりした配石遺構が目をひく。石堂遺跡（高根町）を十菱駿武（山梨学院大教授）は、東日本を代表するもので、八ヶ岳を背景とする金生遺跡（大泉村）より、七百年くらい古い一大祭祀場であったと、山梨日日新聞（昭六一、一〇、一）に寄稿している。

石堂遺跡や金生遺跡は、八ヶ岳・南アルプスを望む場所に位置づくものである。富士山のよく見える場所につくられた、御料平遺跡（南巨摩郡早川町）、中谷遺跡、牛石遺跡（都留市）などは、富士山の遙拝信仰の祭場をうかがわせる。

石崇拜は原始宗教の一つであって、配石は山岳信仰にかかわる共同祭礼であったとする見解を出したのが大場磐雄である。

縄文時代の宗教を研究するうえで、石堂遺跡などは重要な意義を持っている。十菱駿武は、石堂遺跡の中に丸石の配石があることを発見し、それは、山梨特有の道祖神の源流であると指摘している。

石器に対して、釈迦堂遺跡から縄文信仰を示すと思われる土鈴や土笛の発掘がなされているが、これらは原始宗教に広くみられる、精霊崇拜・死霊崇拜・自然崇拜にかかわる祭器であったといわれる。

弥生時代終末から古墳時代にかけての支配者層の墓とみられるのが、上の平遺跡（東八代郡中道町）の方形周溝墓百五十基である。

方形周溝墓は、昭和三十九年夏、中央道の建設にかかわって、宇津木遺跡の発掘調査の折、初めて発見された。発見当時は、関東地方の特有の墓制であると考えられた時期もあったが、今日では、日本全土に認められる墓制として知られる。

また、方形溝墓ですでに火葬の風習があった。肉を腐らせてから骨だけを集めて焼く方法は知られていたが、最近、遺体を墓の中で焼いた弥生後期の異例の火葬が報告されている。今後山梨でもこうした異例の埋葬方法の発見も可能性を持ってきている。

古墳時代の宗教は、イネの農耕儀礼を中心に、日・月・山岳・岩石・水などの自然そのものを崇拜の対象とする自然信仰と、雨・風雷・火など天然現象をひき起こす根源的靈力の存在をみとめ、それを畏敬崇拜する精霊信仰との二つがある。

自然信仰や精霊信仰の姿をとどめている神社やそれらを連想させる祭神には、大石明神（山梨市）・石船明神（一宮町）・大星明神（中条）・大木明神（大月市）それに、雨に関係する、くらおかの神・たかおかの神（一宮町）雷明神（三富村）をあげることができる。

祭りは、一定の神聖な場所を祭場とした。『万葉集』にある「神なびにひもろぎ立てて齊へども」とあるように、常緑樹の枝をめぐらし、青柴垣を結び、その中に神などを立てて神霊を祭った。神を招き降ろす樹木をヒモロギ（神籬）といった。

物見塚（中巨摩郡櫛形町）で発掘された剣玉、鏡などの神器は神庫から出して神に捧げた。神庫は、神宝を蔵する所であったから、人々の信仰の対象となり、やがて神籬を立てないようになると、神庫が神社となっていくた。そして次第に常設の社殿がつくられるようになり、社殿に神体が安置され、神がいつでもいるものと信じられるようになった。しかし、今日でも社殿をつくらないことで有名なのが、奈良県の大神神社である。大神神社を山梨で勧請したのが美和神社（御坂町）や、三輪明神（櫛形町）などである。美和神社の古社は、神座山といわれる。それは、神座と書いてみわと読むところから、最初の勧請の地は、神座山であろうと想察される。そして、勧請当初は神座山を神体として崇拜したものと思われる。三輪明神の場合も上宮地から下宮地に移ったもので、上宮地の山宮は神山と呼ばれ、山そのものが信仰の対象となったと考えられる。

本村にかかわる富士山も、山部赤人が「田兒の浦ゆうち出て見れば真白にぞ富士（不尽）の高嶺に雪は降り（零り）ける」とうたったのは、神体山としての富士の美しさに感動したものと思われる。万葉集にうたわれたころには、浅間神社系の社殿はなかった。噴火によって、荒ぶる神として恐れられるようになる。貞観六年（八六四）以降に、甲斐や駿河などの浅間神社の成立があり、社殿の創建が始まる。

次に延喜式神名帳に載る甲斐の古社を挙げてみる。

山梨郡九座 神部・物部・甲斐奈・黒戸奈・金桜・松尾・玉諸・大井俣・山梨岡。巨摩郡五座 神部・穂見・宇波刀・倭文・笠屋。

八代郡六座 佐久・弓削・表門・浅間・中尾・杵衝。

当然入ってもよい社がなかったり、現在、式内社であるという由緒を名乗っていても、確定できない神社がいくつもある。

山梨郡の神部神社については、『大日本史』では塩山市神金。『神名帳考證』によると、春日居町の加茂明神説がある。

物部神社は、石和町松本のほかに、山梨市の大石明神の高峯を物部山と称することから物部神社だとする説。塩山市赤尾の大石明神の社記に記載されるなど諸説がある。

甲斐奈神社については、国府の官衙の近くにおかれたと想定される社で、春日居町、一宮町、甲府市にある。

黒戸奈神社は、牧丘町倉科、甲府市黒平などがある。それに社記に「黒戸奈神社なり」とあるのが、甲府市穴切神社と甲府市千代田にある細草神社である。

金桜神社は、甲府市御岳のほかに、牧丘町柚口、山梨市歌田、山梨市万力などの説がある。

松尾神社は、塩山市小屋敷、敷島町大下条があげられる。

玉諸神社は甲府市国玉の玉諸神社が有名であるが、塩山市竹森にも玉諸神社があつて、江戸時代の明和・寛政のころ、しきりに式社を争つたという記録が『特選神名牒』にみられる。

大井俣神社は、『神名帳考證』に「大井俣神社、東山梨郡八幡村ニ座ス」としているが山梨市小原の大井俣大神社、それに甲府市川田にも大井俣神社がある。

山梨岡神社は、『大日本史』に「今鎮目村に在り……」とある。春日居町鎮目にあつて、古来、甲州の名勝として知られ、能因法師などの名歌のよまれた所である。異説に山梨市の石森山だというのものもある。

巨摩郡についてみると、

神部神社は『神祇志料』にある「旧宮地村大神山又は神山ともいうにあり。後下宮地に移す。之を三輪大明神という……」とある。

穗見神社について『特選神名牒』では「今あんずるに、本社之所在、高尾村御崎明神、上条南割村苗敷山権現、穴山村諏訪明神、布施村御崎明神など何れも式内穗見神社なりという説ありて詳かならず」としている。そのほか、長坂町上条の穗見神社もあげられるが式内社は定かでない。

宇波刀神社は、甲府市の和戸、それに『神名帳考證』などによると「北巨摩上手村ニ座ス」とある。それに、円野村宇波刀神社（韭崎市）さらに宮原宇波刀神社（甲府市）が挙げられている。

倭文神社の倭文とは、横筋の縞（しま）のある布をさすといわれる。『大日本史』に「今宮久保村に在り」と記されるが、塩崎村（双葉町）の宇津谷の十五所明神の石碑に、倭文神社と彫った大同二年の記録もある。

笠屋神社は、国母村（甲府市）字小河原にあったとされるが、甲府市貫川にあったとする説もある。

佐久神社といわれるのは、石和町河内に座す神社と中道町下向山のものがある。両者の関係は、向山から河内に遷し祭られたと伝えられている。

弓削神社の弓削とは弓削部の住める所であると伝承される。弓削神社は市川大門町字弓削に鎮座している。

表門神社は『大日本史』や『甲斐名勝志』などでは、市川郷上野村に在すとある。市川明神とか俗に市川文珠といわれる。また、一説には白井河原村の表門神社というのものもある。

浅間神社は、富士信仰とかかわって本村の人たちにとつても関心のあるところであるが、どこを式内社にするかは、前述してきた神社同様に諸説がある。

一宮町の浅間神社、河口湖町河口の浅間神社、市川大門町の浅間神社の三社が、本社こそ式内名神大の社であると主張してきている。

一宮町は今日では東八代郡であるが、『和名抄』によると山梨郡に入る所で、それに戦国期において「山梨郡一宮荘」の記録があるなど、八代郡といいがたい。また、『三代実録』の貞観七年十二月九日条に、浅間神社を郡家以南として示している。一宮町の浅間神社は、郡家の南方に当たるとすることは考えられない。従って、河口湖町河口の浅間神社か、市川大門町高田の浅間神社が式内社であろうという見方が、現在のところ有力である。

式内社について概観してきたが、本郡関係では、式内社に入るものとして河口湖町河口の浅間神社ぐらいのものがある。

平安期に仏教が地方に広がるにしたがい、神と仏の結びつきが強くなる。神仏の習合は、有力な神社において、本地垂迹説にもとづき、神宮寺、別当寺を祀ることが一般化してくる。本県でも、大井俣窪八幡神社の普賢寺、塩山市熊野神社の神宮寺、八代町熊野神社の别当寺一乘院（後に千手院）、御岳の金桜神社の弥勒寺、吉田浅間神社の月光寺、御坂町の美和神社の神宮寺、一宮浅間神社の神宮寺など大社には必ず神宮寺または上之坊と称した寺院が所属していた。

神は衆生と同じく煩惱の苦から脱せんために、仏の供養を受けるのを喜び、仏教を崇め、仏法によってこそ救済されるのだという立場から考えられたものであった。神に菩薩号をつけたり、神前で読経したり、写経したりすることもおこなわれた。御坂町美和神社の『天正祭礼帳』によると、四月二十六日「大般若祭」、十一月二十一日は「八講祭」といわれる、法華経を講贊する法会などが行われた記録が残され、さらに祭りの執行も神主だけでなく近在の僧侶が共催したことがうかがえる。また、御岳権現の神幸が渡御の折に、神仏が習合した「御霊会」の行事がおこなわれた。神社での相撲や騎射等の儀式も御霊会の遺風であるといわれる。市川のお文珠さんといわれる表門神社の「文

珠会」は、釈尊に侍して知恵を司どる文殊菩薩を供養する祭事で、神仏が習合した姿を偲ばせるものである。

神仏習合は六世紀に始まり、今日の二十世紀に至る、およそ十四世紀近くにわたって持続してきた歴史現象である。明治維新の神仏分離は、形式的に神社と寺院との区別はされたにしても、長い歴史の経過の中で、深く民間の生活に根を下ろし、習俗化した面を見逃すわけにはいかない。

外国人にとつてみてもこの習合現象は、興味のひかれるところである。

次に本村に存在する八幡神社と春日神社について概観してみたい。

本県で最も多い神社は、八幡神社と諏訪神社である。八幡神社は百二十六社、諏訪神社は百二十七社ある。両社に次いで多いのが熊野神社の六十八社、それに浅間神社の二十八社になる。

地区別では、郡内に浅間神社、巨摩に諏訪神社と八幡神社、熊野神社は全県に平均的に分布している。

### 八幡神社

八幡神の起源はかならずしもはっきりしない。八幡をはじめ、ヤハタと読んだが、平安時代以降になると、ハチマシと音読するようになった。八幡の語義は、多くの幡はたということであるから、古代においてたくさんはたの幡を立てて祭る神があり、そこから由来するといわれる。

八幡信仰は、豊前国宇佐八幡宮（大分県）が総本社で、分祀された神社は、全国に二万四千以上もある。主神は応神天皇（誉田別尊）で相殿神に比売神ひめのみことと神功皇后（息長帯比売命）おきなかつらひめのみことを祭っている。

宇佐八幡は奈良時代、和氣清麻呂が勅使として下つて神託をうかがい、道鏡の野望をくじいたことで知られる。

平安時代になると、京都に勧請され石清水八幡として皇域鎮護の神となる。こうして皇族や貴族から信仰されるうちに、清和源氏の崇敬をうけ、特に頼義・義家・頼朝らが厚く信仰し、鶴岡八幡宮を創建し氏神とする。武家勢力の

発展とともに武士の守り神として、全国的に崇拜されるようになる。

なぜ、八幡神に応神天皇が祭られることになったのかについては、江戸時代から研究が始められ諸説がある。

応神帝は宇佐に生誕し、王族の始祖としての人物で、その母后の神功とともに新旧の二王朝を一系の血統に統合されるに關係のある立場にあったとする説が有力である。

さて、山梨の八幡神社は、甲斐源氏武田に由緒をもつものが多い。

西下条八幡、新羅三郎義光が石清水より勧請したとある。

西保中村若宮八幡は、安田義定が勧請。

石和八幡は、石和五郎信光が鶴ヶ岡八幡宮から。

源義清が勧請したと伝えられるのが、上黒沢八幡である。

小笠原長清が宇佐八幡宮から勧請したと社記にあるのが上宮地八幡である。

加賀美遠光が草創したといわれるのが、寺部八幡である。

武田の勢力の拡大とともに、武田が領有した地域、荘園とか庄に八幡宮が創建されていった。『甲斐国志』巻之六十五 神社部第十一の大八田村の八幡宮の記載は「八幡山ニ在リ除地田一段歩社地若干、社記ニ曰ク古地ハ六七町東ニ在リテ巨祠ナリ大八幡ノ庄名モ本祠ヨリ起ルト云ヘリ」とある。

八幡北村（山梨市）は、八幡宮に由来する地名である。『王代記』の応安七年の条に「八幡庄大乘経書」とあるように、八幡の庄に神社が創建され地名になったものである。しかし、土地を武士の侵略から守るために、八幡宮を称することに よつて難を免れたという状況もあったから、甲斐源氏の庄とかかわりなく、八幡神であるといったところもある。

祭神は、貞観二年僧行教により山城石清水に勧請。この時より祭神は応神天皇・神功皇后であるという説が広ま

る。山梨の場合、窪八幡宮は、中御神は誉田別尊・応神天皇、北御神は足仲彦尊・仲哀天皇、南御神は氣長足姫尊・神功皇后となっている。窪八幡宮は宇佐八幡から勧請したといわれるが、宇佐八幡は、八幡大神（誉田別尊）が一の御殿。二の御殿に比売大神、三の御殿に神功皇后とほぼ照応しているが若干の違いが認められる。

『甲斐国社記』によると、祭神を誉田別尊（応神天皇）とするのは共通的であるが、時に八幡大神と表現している例が石和八幡宮である。

特殊なものに下吉田新屋敷組にある武田八幡宮は、武田に仕えた家臣が、武田家没落後浪人してから創建されたとする由緒を持つ神社である。そんな経緯の中で祭神は武田八幡であるとしている。

寺院関係でよく宗派がかわったということをきくことがあるが、神社の場合もそれに似た形がある。甲斐源氏の勢力が盛んになるに従って古い神から新しい神（八幡宮）にかえた例を掲げてみる。

大井俣神社（山梨市）・布施村穂見神社（田富町）・高部村竹輪神社（豊富村）・小倉村中尾神社（須玉町）・石和物部神社（石和町）・島上桑村土屋神社（敷島町）

八幡宮にかえた例をみたわけであるが、社名をかえず古い神と新しい神（八幡神）を両立させている例もいくつもある。両立させたものは相殿という形で祀られている。

下神内川村 山王社 八幡宮 千塚村 大宮明神 八幡宮

寺部村 山王社 八幡宮 酒折村 酒折宮 八幡宮

村山西割村 熱名神社 八幡宮

八幡宮は早くから仏教と結びつき、平安時代の初めには、朝廷から大菩薩号が贈られ僧形八幡の神像がつくられる

ようになった。

そうした仏教との習合関係は、甲斐でもみることが出来る。特に日蓮宗の総本山のある身延方面、峡南地区は日蓮宗と結びつき、寺が神社を管理する傾向が多くみられる。

飯富村八幡宮	日蓮宗永久寺撰祀ス	楮根村八幡宮	日蓮宗要行寺撰祀ス
平須村八幡宮	日蓮宗妙光寺撰祀ス	市ノ瀬村八幡宮	日蓮宗妙円寺撰祀ス
赤沢村八幡宮	日蓮宗妙福寺撰祀ス	上佐野村八幡宮	日蓮宗円応寺撰祀ス
大城村八幡宮	日蓮宗妙覚寺撰祀ス	下佐野村八幡宮	日蓮宗法源寺撰祀ス
横根村八幡宮	日蓮宗実教寺撰祀ス	十島村八幡宮	日蓮宗浄泉寺撰祀ス

江戸時代を通じて神社は、右のように寺が強く関与したものは寺持ちといえる。一般的に分類すると五種類あった。それは、神職持ち・寺持ち・村持ち・座持ち・個人持ちであった。神職持ちは世襲はもとより、朱印も黒印も神職あてで、経営収入等も一切神職の手になったものである。寺持ちは、寺の鎮守等で、経営祭典等も僧侶の手によつてなされた。村持ちの神社は、神職は祭儀を行うための雇い人で、経営権を持つのは名主であった。次に座持ちであるが、宮座と称する団体が所有していたもので、村民は祭礼に参加しても、実権は座にあった。個人持ちの神社は、個人が自家所有の土地に社殿を設けて勧請したものである。

八幡宮の個人持ちのものを掲げてみよう。

「八伊郡夏目原村 八幡宮」

私先祖小沢次郎重政、鎌倉右大将え仕え奉り建久丁巳年、御台所、由井ヶ浜御遊船の供、仕り奉り、その節、鰐御船を襲い既に危くなされ候折に、重政海中え飛入り鰐を刺し退け、御船悉なく御有、之に依り、御守の八幡宮の神影を賜り元久二年鎌倉を致仕賜った神影夏目原村に祭奉り候……。

右の小沢家は武田に仕え、武田滅亡後は土着して百姓になる。八幡宮は、個人持ちとして護持される。六拾貳間半八反拾五間

幡宮社地耆町耆反を越える広さを持った。

これに対して楮根村にも百姓持ちの八幡宮があった。

こうした個人持ちがあることは、八幡宮の信仰が民衆に広く浸透したことを意味する。

### 春日神社

本村に春日神社があるので、ここで概観してみたい。

春日神社の総本社は、奈良市春日野町にある。建甕槌命(下総鹿島の神)・経津主命(上総香取の神)・天兒屋根命(河内枚岡の神)および比売神の四座を祀っている。

藤原氏の氏神である春日神社に、なぜ東国に鎮座する鹿島神を氏神の第一としたかについて、疑問のもたれるところである。

一説には「祖神以外に威大なる神を加えて自家の隆盛を願った」というのもあるが説得力がない。宮地直一は「初めは此神一座を祭祀するに当たって、景雲年中若しくはそれまでに、他の三座を増祀したものといへる」というのが妥当する説であるといわれる。

それでは、なぜ鹿島神を第一にしたかであるが、それは鎌足の出自に関係がある。

藤原道長のことを中心に書いた『大鏡』に、中臣鎌足は、鹿島の人であるという記述がある。それに『常陸風土記』に、中臣鎌足と推定されるような人物が登場することから、中臣の神を、春日社の第一に位置づけたといわれる。

鹿島の中臣という氏は、鹿島社の所在地の国名であった中(那珂)で、国造家の一族で地名をとって中臣となったとするのが、太田亮の見解である。

さて、春日神社は、次にあげるように、現在の大月市方面に多く存在する。



山神社・大田和

瀬戸村・駒宮村・下和田村・奥山村・宮谷村・浅川村・藤崎村・畑倉村・奈良子村・林村・猿橋宿などである。

祭神は、ほとんどが天児屋根命であるが、浅川村の春日社は、武甕槌命である。それから、宮谷村と猿橋宿は、諏訪と春日明神が相殿になっている例もある。

珍しいのは、桐原村にある児屋根社である。江戸時代、春日大明神とよぶのが、一般的である。それが祭神を表に出して児屋根社と称しているのである。

#### 山神

本村の住民にとって山神を忘れてはならない。山の神は、大山祇神である。大山祇神を大山津見神・大山積神と記すことがある。『古事記』では、奥山津見神・志芸山津見神・羽山津見神・戸山津見神など種々の山の神をあげている。

本居宣長は大山祇神は種々の山の神を、総覧主宰するものであると解釈していた。山祇とは、山津持ちということ、山を持つという意味がある。種々の山津見は、分担して持つが、大山津見は、すべての山神を受け持つから大を称するという。この大山津見は、山の最高神であるから「山ハシモ天下ニ多ケレド、此富士山ヨリ大ナル山ナケレバ、コノ所ニ大山祇ノ鎮リマシテ、富士ノ神トイラカレ玉ヒ、其御子木花開耶姫命、苔虫ノ神（石長姫）父ノ神トトモニ、此山ニ天降リマシ……」とある。

右は『駿河新風土記』によるが「山は天下に多ケレド、富士山ヨリ大ナル山ナケレバ」こそ大山祇命が鎮座しているところである。

伝承によるとこの大山祇神は仁徳天皇の時代に、百濟国より渡来し、摂津国の三島の地に鎮座されるが後に、伊予国に移り三島大明神と称したといわれるが、大山祇神が渡来神でも別に不思議なことではない。仏教もインドの神である。エビス様も異国の神であるからである。

「山ハ天下ニ多ケレド、富士山ヨリ大ナル山ナケレバ」といわれる日本一の富士の、西北面の大部分を占め、樹海から頂上まで鳴沢村であつて、本村には、「字富士山」がある。こうした立地からして、山の神を総覽主宰する大山津見神は、大田和の「山の神」の祭典などに、その信仰の深さの一端をみる事ができる。

山国である甲州には、摂社や末社として祀られる山神は大変多い。北巨摩郡須玉町津金の藤岡神社には、十一の末社があるが、そのうちの五社が山神であつた。中巨摩郡白根町上八田の諏訪神社も十一の末社のうち六つが山神を祀っている。また南巨摩郡南部町内船七カ所、それより多いのが、西八代郡下部町常葉で十五カ所の山神がある。

『甲斐国志』で「山神ノ社アリテ村名ヲ得ル」とあるが、中巨摩郡田富町山之神である。江戸時代、村名にならなかつたが、土民が山神と称した村に、八代郡狐新居村（東八代郡一宮町）がある。『甲斐国志』に「本村ノ土神ナリ古ハ大積寺山入り合ヒ六村ノ鎮守ナルベシ此ノ神ノ靈験ハ州人ノロスル所ナリ他ヨリ本村ヲ呼ビテ山ノ神ト称スルモ此ノ神ヨリ起ル」とある。

田富町山之神と一宮町狐新居（山ノ神）は山神信仰が地域住民と密着した姿を、地名にとどめたものである。

山神の祭は、二つの類に分けられる。一つは正月年頭の初山入り、初山踏みで、もう一つは、春秋二季にほぼ定期的に催される山の神祭がある。正月年頭の祭りは、二日ごろから十四日ごろまでに行われるハツヤマ行事としての慣

行的信仰である。本村の『広報なるさわ』の「年中行事」一月のところ、十七日「山の神祭り」が紹介されているが、全国的なものよりハツヤマがおそいといえよう。

日本民族の原始信仰の一つである山の神信仰は、二つの形態に分けて見ることができる。その一つは、山岳信仰によれば、本村の富士山のような名山を崇敬し、広い地域の信徒によって講を形成し、小御岳神社・浅間神社などの社祠を営むものがある。それに対して、山中の古木の根元か岩か石の置かれているあたりに、ささやかな仮屋を建て、その地区の人たちだけに信仰されるものがある。

本村に浅間神社が存在しないことが不思議である。この点に関しては、今後の課題である。

## 第二節 村内の神社

### 魔王天神社

鎮座地 鳴沢村西原七五八五―二

祭神 経津主命

宮司 田辺瑞彦

例祭日 四月十八日

境内地 四千八百五坪

氏子戸数 三百戸 崇敬者数 三百人

由緒沿革

由緒を『甲斐国志』でみると、「魔王社ハ神殿無く、社地壱町除地ナリ、宮主権左衛門、此社中ニ古ヘ太郎坊ノ小祠アリ、後富士ノ中腹小御嶽ニ移シテ、小御嶽権現ト称ス」とある。

『甲斐国志』は、今から百七十三年前のものであるが、当時の学者が厳密な資料の選択によって正確を期しているものである。

右の内容から、文化年間には、社地は壱町歩あつたが、社殿がなく、山そのものが信仰の対象だつたとも推定できる。

『日本社寺明鑑』によると、「八代郡下部町熊野神社の近くの北北西の方角にあつた。承和三年（八三六）に修理大夫正信が創建、享祿元年（一五二八）神慮により現社地に遷宮した。戦時中には近郷近在より武運長久祈願の参詣人で大変にぎわつた。

魔王天神社の魔王とは珍しい神社名である。県内には、六郷町落居に魔王天神社が、それに上九一色村精進に魔王天神の屋敷神がある。なぜ天神に魔王がつくのか不思議である。天神信仰では、菅原道真の死後、その怨霊が天にのぼつて大自在天満、火雷天神と呼ばれる大魔王になつたとする伝承がある。しかし、もしこの推論でいくならば、祭神も菅原道真であつてよいと思うのだが、本村の魔王天神社の祭神は、経津主命である。

経津主命は、道臣命・日本武尊・神功皇后などとともに武神として知られる。魔王という面からみると、学問の神より武神の方がふさわしいかも知れない。

経津主命を祀る神社には、香取神宮（千葉県）・春日大社（奈良県）・枚岡神社（大阪府）・大原野神社（京都府）などの大社が有名である。

武神である経津主命に武運長久を祈願して、武具がたくさん奉納されているのもこの神社だけで、県内では大変珍

しい。

経津主命は『日本書紀』によると、伊邪那岐神が火神の迦具土神を斬ったとき、剣から滴る血が固まって天安河辺の五百箇磐村になった。それが経津主命の祖であると記している。

『日本書紀』では、経津主命は武甕槌神とともに天神の命を受けて出雲国へ降り、大国主事代主の父子二神に国譲りを交渉して、成功をもたらしたと書かれている。

『古事記』では建御雷神と経津主命は同神らしく書かれていて、「建御雷之男神またの御名、建布都神、豊布都神」とある。

建御雷神と同神であるという考え方に立つと天神の大自然とか火雷天神などの火雷も理解できるように思える。なお経津主命を伊波比主神、斎主神と書くこともある。

経津は刀剣神としての属性を現わす語で、フツは剣の切れる音を現わし、威力を意味するものとされている。この本村の魔王天神社が、小御嶽神社の本宮であることもあげておかねばならない。

『甲斐国志』の当社ところに、「此社中ニ古へ太郎坊ノ小祠アリ、後富士ノ中腹小御嶽ニ移シテ小御嶽権現ト称ス」さらに「小御嶽大権現(富士北面中腹ニアリ)祭神岩長姫命右傍ニ日本武尊祠及ビ大天狗・小天狗祠アリ相伝フ古へ成沢村ノ郷民此ノ山中ヨリ材木ヲ伐リ出シケレバ小社ヲ建立シテ鎮守ノ神ヲ祭リケル享保ノ比マデモ太郎坊正真ト号シテ小社ナリシガ近世年ヲ累ネテ尊信スル者多ク造営益々盛大ニナリ殿宇軒ヲ重ネケル拜殿・幣殿・御供所・随神門・天狗門(唐銅ノ大小天狗ノ像ヲ安ズ)箒屋四字・神馬屋二厩・鐘楼一字半鐘三口・唐銅水盤方一丈許四足門・石水盤(自然石ヲ用銅屋アリテソレヨリ桶ニテ雨水ヲ引入水盤高四尺余径五尺五寸長七尺此辺水ニ乏シ故ニ雨水ヲ用)関東ノ信者奉納ノ神器夥シ皆大器ヲ奉納スルヲ名望トス其一ニヲ挙グレバ斧刃長二尺八分広サ二尺四寸重サ百八貫匁柄長一丈二尺

太サ一尺三寸、神劍長六尺五寸鞘六尺八寸鏝厚サ一寸二分径一尺四寸柄長二尺九寸重サ六十貫目、此外、鈴・笛・錫杖・木履等皆准ズレ之レニ枚拵ニ暇アラズ神主小佐野伊賀」

小御岳権現は、『富士山真景之図』によると、「小御嶽石尊大権現」といつた時期もあつた。嘉永元年（一八四八）に江戸築地鉄砲州に住んだ富士講社の月三講先達、長島庄次郎こと、英湖斎泰朝の『富士山真景之図』によると、鳥居には小御岳と書かれ、次に隨身門・水盤・御供所・天狗門・幣殿・コモリヤ・神馬屋・鐘楼・末社なども詳細に描かれ、参詣したときの紀行文もそえてある。その紀行文に、小御嶽石尊大権現と記されている。内容の多くは『甲斐国志』を引用して小御嶽を紹介している「五合五勺、小御嶽石尊大権現参詣道、横吹という所雲の中也、鳥居より三十町計ゆけば大門に出る、この地富士山半腹より北に突出せし峰あり、社地二町許り、——」とある。

石尊とは、相州の大山詣で知られる。この小御嶽権現も、嘉永期には、雨乞を祈願する所として信者を集めていたようである。

小御嶽権現を主宰したのが成沢村であつたことを物語る文書を「広報なるさわ」を参考に掲げておきたい。

成澤郷

きも入

次郎左衛門

源兵衛

源兵衛㊦

藤右衛門拇印

彦兵衛㊦

八良兵衛㊦

弥右衛門㊦

四良右衛門印

清右衛門拇印

権兵衛拇印

往古より大隅山御鷹山の東地勝にはこらを立小御嶽権現を

祭り置候所、是より毎月十七日、日待致す可候、もし対談

相違之者は神罰之有可者也

天正七巳卯年二月吉日

次郎左衛門㊦



魔王天神社

魔王天神社は、六郷町落居六七〇にもあることを先に述べたが、六郷町の魔王天神社は、後鳥羽天皇の時代に勧請したと伝えられている。そして祭神は、本村の経津主命とちがって、素戔鳴命である。落居は、天神社の多い所で他に三社あるが、それらは旧村社で、祭神は、そろって菅原道真である。

天神信仰を分類すると、一、あら人神、二、慈悲の神、三、正直の神、四、学問の神、五、和歌の神、六、書道の神、七、国家鎮護の神、八、孝道の神など多様な信仰がなされている。魔王のイメージにびったりするのがあら人神である。

さて、六郷町落居六七〇の魔王天神の祭神素戔鳴命は、牛頭天王に比定され武塔天神とも呼び京都市の八坂神社（祇園社）の祭神になっている。

また愛知県の津島神社も式外社ながら、広く地方民に崇敬され、牛頭天王社の名称で親しまれてきた。

本村の天王信仰も盛んであったらしく、その社は、旧保育園の後ろの足和田山の尾根裾にあったといわれる。その跡地は天王様の地名が残され、かつての信仰を偲ばせている。その天王様の御神殿は、春日神社の拝殿の中に鎮座している。

大田和の天王様は、八幡神社の境内社として信仰されている。天王社の氏子は、祭りの前にきゅうりを食べないといい禁忌がうえつけられているという。そんなことから大田和でも天王様にきゅうりを供える風習があるのかも知れ

ない。なお七月の天王様の祭りには、大人は「鮎食い」に河口湖の方へ出かけたという。地方へ広がった天王様の信仰は、疫病を免れるための最有力の神であるとする説によって、各地で盛大な祭典が営まれるようになった。

天王様の祭りは疫病の流行のきざしの見え出す季節であり、農民が病害虫害に悩まされる季節とほぼ一致し、農山村の生業と深く関連していた。

春日神社

鎮座地 鳴沢村水上八、〇七三

祭神 天兒屋根命

宮司 田辺瑞彦

例祭日 四月十八日

境内地 一千五百七坪

氏子数 三百戸

由緒沿革

平安時代後期長元年間（一〇二八―三七）甲斐守頼信「勅を奉じて」謀反上総介忠常を征する時、頼信の臣蓑田氏戦勝祈願し、長暦二年（一〇三八）その報賽に社殿を造営する。江戸中期明和八年（一七七二）社殿を再建する。

『山梨県市郡村誌』によると、社地東西二十二間、南北五拾間、面積千百五拾坪、祭神天兒屋根命、祭日陰暦三月十五日、九月十九日、祭神の天兒屋根命は、天の岩戸神事において卜占を掌り祝詞をとなえたと『記、紀』にある。

祝詞を奏したということは、祭りを執行了ことであり、天孫降臨の際、天照大神から、この神（天兒屋根命）に「宜しく天津神籬を持ちて葦原中国に降りてまた吾孫のため齊まつれ」との勅があった。もっぱら神祇を奉祀する家柄で



鳴 沢 の 春 日 神 社

あつたと考えられている。

中臣氏の祖神であり『日本書紀』にも「中臣連の遠祖天兒屋根命」とある。

天兒屋根命の後裔である中臣・藤原氏に関する研究の豊富さに比べて、この神自体のもつ問題や神話上の位置づけについては、十分に論じられているとはいえない。

本県の春日神社は、大月市に多くある。創建の時期については、由緒不詳とするもあるが、大月市下和田大同三年、畑倉大同三年、奥山大同二年、駒宮大同年間（八〇八）と記述されるものが多い。なぜ大同年間とするものが多いのかは、はっきりしない。

さて本社の創立は、長元年間とされ、平忠常の乱と関係があると由緒が伝えられている。「平忠常の乱」とは、長元元年（一〇二八）前上総介平忠常が、安房守惟忠を焼き殺したことに始まる。平将門乱後の大乱であった。律令軍隊が解体し、忠常が三年間にわたり房総地方で権力をふるう。朝廷では平直方に追討を命じたが失敗。その後源頼信を派遣する。忠常は戦わずして頼信に降伏した。忠常は頼信に護送されて上洛中に美濃野上で病死した。この忠常の子孫は、千葉氏である。

本県の中で、甲斐守頼信が社殿を造営したと伝えられるのが山梨郡北山筋千塚村（甲府市）の八幡宮がある。平忠常の乱の折に、戦勝を祈願し、神社を創建した蓑田氏という人物は、はっきりしない。太田亮『姓氏辞典』で「ミノ

ダ 藤原姓相良氏の族にして、肥後八代郡南種山陣内を守る。……此の蓑田氏は藤原姓……」藤原氏から出た蓑田氏があるということであるが、肥後の蓑田氏と結びつくものか判然としない。しかし藤原系統であれば、藤原の氏神である春日神社を造営することも考えられるが、推定の域を出るものでない。

『甲斐国志』にも蓑田という名族は出てこない。従って創建の時期、創建にかかわった人物については、今後の研究課題である。明治四十年指定村社。

春日神社の神楽は、今から百二十年前の明治元年に源右衛門という人が、市川大門町から神楽の師匠を招き伝授をうけたときから始まるという。

明治元年に市川大門町の老人から、直接教えをうけた人たちを掲げておきたい。儀八（沖村の人）常清（渡辺茂さんの先祖）伴左衛門（渡辺建一さんの先祖）一郎兵衛（渡辺秋子さんの先祖）庄左衛門（三浦楨太さんの先祖）らだったと『広報なるさわ』にある。なお明治初年の若衆の跡をつぎ活躍した人たちも記録しておきたい。渡辺与左衛門・小林武良・渡辺仁衛門・渡辺福松・渡辺卯之甫・小林豊作・渡辺長吉・渡辺舜作・渡辺国吉・渡辺春松・渡辺直吉などがいた。

神楽にはまず口上ともいべき祝詞があるが、それが奏上された後、十二の舞が次のような順序で奉納される。よせ太鼓

- |   |       |   |      |    |      |    |      |    |       |   |        |   |       |   |    |
|---|-------|---|------|----|------|----|------|----|-------|---|--------|---|-------|---|----|
| 1 | 乙の舞   | 2 | 五行の舞 | 3  | 太玉の舞 | 4  | 鈿女の舞 | 5  | 猿田彦の舞 | 6 | 事代主命の舞 | 7 | 国固めの舞 | 8 | 須佐 |
|   | 之男命の舞 | 9 | 金山の舞 | 10 | 岩戸の舞 | 11 | 弓の舞  | 12 | 乙の舞   |   |        |   |       |   |    |
- よせ太鼓 次で千秋楽を歌う。  
千秋楽には谷をのぶ  
万歳楽には命をのぶ

相生いの松風  
さあー幸の声ぞ樂しむ  
さあー幸の声ぞ樂しむ

### 八幡神社

鎮座地 鳴沢村大田和三三三二・三三二四

祭神 応神天皇



### 八幡神社

宮司 田辺瑞彦

例祭日 四月二十五日

境内地 六百四十三坪

氏子戸数 百六十戸

由緒沿革

創立は慶長年間（一六〇〇）と伝えられる。寛政年間、集落一帯の火災のため類焼し古記録も焼滅する。文政八年（一八二五）一月二十九日本殿落成。文化十四年（一八一七）に拝殿竣工。明治五年村社に、明治四十年指定村社に列せられる。昭和五十七年七月十六日鳴沢村文化財に指定。

『山梨県市郡村誌』によると、本社々地東西、式拾三間三尺、南北、式拾式間一尺、面積五百式拾一坪、本村大田和組ニアリ祭神息長足比売尊、祭日、陰曆三月十五日とある。

本村の八幡神社の祭神は、応神天皇であるが『山梨県市郡村誌』では、息長足比売尊とある。

八幡神社の総本社である宇佐八幡は、主祭神が応神天皇（誉田別尊）で相殿神が比売神と神功皇后（息長足比売尊）となっている。それに仁徳天皇（大鶴鷄尊）を祀る所もある。仲哀天皇——神功皇后——応神天皇——仁徳天皇

『日本書紀』によると右のような系統の天皇や皇后が祭神になっている。

本社の息長足比売尊が応神天皇にかわることも別に珍しいことではなく、時代によって変化したり、地域によって、同一化の傾向がある。

県内の八幡神社の祭神の八〇％百二十社余は誉田別尊（応神天皇）で、次が大鶴鷄尊（仁徳天皇）が二十社と次いで多く、それに応神天皇とするのが十五社、神功皇后は六社ほどである。なお、右の三神を祭神として合祀しているところも若干みられる。

八幡神社の秋祭り（九月十五日）の神楽には、特色があることを、民俗学で知られる大森義憲が指摘している。

神楽は、宮中でやる「御神楽」と民間の「里神楽」がある。里神楽では「天岩屋戸」神話のアメノウズメノミコトの故事に神楽の起源を求めていることが多い。そのため「神代神楽」とか「岩戸神楽」と呼ばれる。

大森義憲は「南都留郡鳴沢村大田和の神楽のうち玉の舞・玉あらそいの舞は天鈿女命・鬼・鍾旭・オカジャアキ（薬王権現）が出て最後に鬼とオカジャキとのかまけわざ、まぐわいの所作があり、これをヨミセ（夜見せ）」といっている。大田和では、三十六座の神楽のなかで必ず行わなければならない四座の神楽があり、これが終わらなければ祭は終了しないという。神楽は種目によって行われる時間がさまざまであるので、最後にひきめ矢を射るころには明け方になる。明治時代までは神楽と念仏を交互に行っていたという。

神楽がすむとすぐに舞台で百万遍の珠数をくり、太鼓や鉦を打ちながら念仏を唱える。念仏の許可は天保十五年

(一八四四) 九月に勅願所六斎念仏惣本寺、光福寺の清誉上人から受けたものとされている。北都留郡小菅村小永田には、神代神楽と称してはいるが、ほぼ前述のものと同様な神楽がある。」

この大田和の神楽で興味のひかれるところは、明治時代までは神楽と仏念を交互に行っていたという点である。神仏の習合ということは、現代では不自然に思うところであるが、江戸時代は、民衆の中に神と仏が融けこんでいたのである。

祭日は『山梨県市郡村誌』で見ると陰暦三月十五日とある。なお本村の記録によると、明治十四年は四月十三日(旧暦三月十五日)、同三十年四月十六日となっていて、旧暦だと大体四月十五ところが祭典日であった。大正三年は九月十五日に祭典を行った。戦後、四月二十五日となった。